



反戦川柳人鶴彬研究序説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010640

反戦川柳人鶴彬研究序説

木 村 哲 也

はじめに

反戦川柳人鶴彬（一九〇九―三八）については、さまざまに関心を持たれながら、まとまった形のものがないように、僭越ながら思える。

本稿では、可能なかぎり、諸資料に当たって、率直な感想を述べることにした。

さて、『鶴彬全集』には、一九七七年に一叩人（いっこうじん）編でたいまつ社から刊行されたものと、一九九八年に作家の澤地久枝が自費出版したものとがある。

前者は、一叩人がガリ版で書写して刊行していたものを、新たに活字に起こしたものである。

後者は前者の修訂版であるはずだが、そうとも言えないところがある。

増補された部分が、全く明示されていないからだ。

前者を先に手にして、後者を後から手にしたりすると、

どこが新たに加わったかがわからず、もどかしい感じである。「復刻にあたって」という増補の箇所、述べてほしかった。

また、逆に削除された部分もある。

索引の削除は残念だ。何としても旧版と同ページ数を保つ、という感じがする。

さて、略年表の削除はお断わり書きされているし、伝記が一人歩きしているからという、その趣旨にも賛成だが、「鶴彬に関する文献」は、削除のお断わり書きもない。

増補する気がないため、ともとれるが、それでは情けない。本稿は完璧が期せた、などとは毛頭思わないが、その一助のつもりである。

一―一 作品の追加

まず、川柳作品以外の追加である。

評論では、以下のとおりである。

「新興川柳詩野に就て」大正十五年八月六日、七日『北国新

聞

「明日の川柳詩壇私観」大正十五年八月二十五日『氷原』

「一握の砂」その他 大正十五年十二月二十二日『北国新聞』

「地底の呻き(上)」昭和二年三月二十日『北国新聞』

「地底の呻き(下)」昭和二年三月三十一日『北国新聞』

「川柳の正しい発展に就て」昭和九年十一月二十五日『川柳

倶楽部』

新聞記事としては、兵隊時代に見かけたのが、後の鶴彬だったという、昭和五十二年のものが収録されている。他に、昭和六年の軍法会議の記事も収録されている。

また、井上信子の日記は、旧版全集では清書バージョンのほうであったが、新版全集には、生稿も併録された。

以下のような感じである。先に清書、後に生稿である。

昨晚〇〇〔靈安〕室へ移したといふ。道を聞いて〇〇室へ趣き「ママ」待つ事一時間、母に付き添ひ三人の兄妹がやって来た。中で長兄は昨夜わざわざ盛岡から出京したとの事、お互ひの挨拶は至極簡単ではあったが言葉に出せぬものが通じ合っているやうに思へた。〔四百六十九ページ〕

一同〇〇室に入り永久の別れの合掌である。彼の意味と同

じに頑強であった肉体は傷ましいほどスリ減らされ、出す文のエネルギーを発散し尽くし、然る後君はいつも安らかに闘士の影さへも皆無に見える。〔四百七十ページ〕

清書のより、生稿が読めてよかった感じがする。

そして、「思い出の鶴彬」であるが、旧版全集では、渡辺尺蠖、勝目テル、井上麟二、秋山清、小田無限、中村秀子であったが、烏三平が加わった。

後になったが、川柳作品についてである。

旧版では、追録を入れても、大正十四年発表のものからの収録である。

新版では、大正十三年十月に『北国新聞』発表のものから収録されている。後出の、澤地久枝「鶴彬全仕事」でも、その作品が引かれていた。

大正十四年発表分でも、新版全集での初めての収録のほうが一圧倒的である。

大正十五年では、やや少なくなるが、まだまだある。

昭和からは、だいたい少なくなるが、まだある。

ぞんざいなまとめ方であるが、むしろ、同一作と見られるものの異文を整理するとか、時代背景、伝記とは切り離し、むしろ使用語彙の分析などの研究が有効に思われる。

なお、増補された詩は、以下のとおりである。

「衰弱した四月の思想」、『北国新聞』昭和二年五月六日

「落ちる枯葉を見た私」、『北国新聞』昭和二年十二月十五日

「文明が押し寄せて来た（上）」、『北国新聞』昭和三年一月

二十五日

「文明が押し寄せて来た（下）」、『北国新聞』昭和三年一月

二十七日

「因習の殻を破れ」、『北国新聞』昭和三年二月二十八日

書簡も増補されている。

また、書簡は後ろにまとめられて、ある意味ではわかりやすくなった。

大正十四年十一月十五日

大正十五年月不明二十五日

昭和五年のものすべて

昭和十一年日付なし

昭和十一年八月

昭和十二年十月一日

昭和十二年十月十四日

昭和十二年十一月一日

昭和十二年十二月一日

一―二― 一 叩人筆写の問題点

仮名遣い、記号類の処理は大目に見るとしても、やはり文意にかかわる書き写し違いが目につく。

たいまつ社版では、ガリ版との合わせだけで、初出誌との照合までは手が回らなかったのだろうか。

あえて、例示する。

川柳が低級下劣な詩をしかもっていないのはきたない通俗の長屋属に住んでいたのである [旧版、二百九十二ページ]

川柳が低級下劣な詩をしかもっていないのは、きたない通俗の長屋に住んでゐるためである [新版、三百二十三ページ]

読点を省き、「属」が入り、文末はかなり違う。ここはやや極端な例だが、読点に関しては、うっかりというより、適宜、意図的に手を入れたかと思られる感じもするのが残念である。澤地久枝の、新版全集での感想（「復刻にあたって」）も引かねばなるまい。

たいまつ社版全集を土台にして編集をすすめていた日、わたしは原本の正確さについて疑いをもたなかった。

校正作業がはじまり、『氷原』の紙面とのつきあわせをしたとき、愕然とした。多少の活字の組み落しや誤植はまぬかれがたいものとしてある。しかし、「自信」が「自身」に「理性」が「思想」になつてゐるのはまだいい方だった。文意が伝わらず、鶴彬の悪文とさえ思つた文章では、たとえば「愚者」が「患者」に変えられ、二百字以上の文章の脱落があるなど、逆の文意を生んでもいた。それは、舌足らずな若い評論、本来の文章とは似て非なるものを後世にのこす結果を招いてゐる。真つ赤になつたゲラを前に、鶴彬を痛ましく思う思いが身をつらぬいていた。〔四百八十六ページ〕

また、一叩人による註は、なくなつてゐる。申しわけないが、場当たり的でもあり、仕方がないだろう。

ガリ版での限界性も感じつつ、意欲は買うが、基本的には読み直しとなる。

かえつて理解を深められる、と、嫌みではないつもりで、あえて申し上げよう。

一一三 評論の分類

まずは、旧版全集目次から、川柳以外の箇所を、編年体で引く。

頭に付したのは、木村のつけた整理番号である。

そして、その後のアルファベットは、先回りの形になるが、

分類記号である。

大正十四年

一 A 革新の言葉

大正十五年

二 B 福村無一路君を惜しむ一文

三 A 即論二題

四 A 感想一纏

五 B 古屋雪村論

六 A 貧しい頭の断層面

七 A 明日の新興川柳私観

八 D 反逆とABC

九 D 月評

十 A 近代的ニヒリズムとわがニヒリズム

十一 D 第一短詩集を読む

昭和二年

十二 A 二頭作家に就いて

十三 D 理智の悟性的昇華

十四 A 短詩時代来る

十五 A 虚無の殻を破る

十六 A 僕らは何を為すべきや

昭和三年

十七 B 宮島氏の思想に就いて

十八C 川柳の発生的意義と新興川柳の方向転換

十九A 生命派の陣営に与ふ

二十C プロレタリア川柳の美学的見地

二十一C プロレタリア川柳批評への批評的走り書き

二十二B 古屋氏へ送る決闘の書への前書

二十三C 全国新興川柳詩人に与ふ

二十四A とり残された問題の走書き的解決

二十五A プロレ文化へ

昭和四年

二十六A 柳壇時評的漫筆

二十七D 失はれたる写真主義への揚棄

二十八A 芸術における美の階級性と宣伝性

二十九C 川柳座談会

三十C プロレタリア川柳運動と「川柳人」との問題

昭和九年

三十一A 富士山と煙突と美と

三十二B 木村半文銭論

三十三B 木村半文銭論(承前)

三十四C 柳壇時評

三十五E 定型律形式及び図式主義への闘争

三十六C 川柳のジャンルに就いて

三十七E 定型律形式及び図式主義への闘争(承前)

三十八A 町の織物インフレと女工たち

三十九D 「柳人街」におくる

四十D 柳壇時評

四十一D 柳人街二十二番斬り(一)

四十二D 柳人街二十二番斬り(二)

昭和十年

四十三CEA 柳壇の時評的雑感

四十四C 川柳に於ける詩の問題(承前)

四十五E 自由律発見におけるセクト主義の批判

四十六C 川柳における諷刺性の問題

四十七C 川柳レアリズムに就いて

四十八C 川柳における詩の問題

昭和十一年

四十九C 川柳職業化の問題

五十C 川柳の詩壇的進出に就いて

五十一D 作品に就いての感想

五十二D 課題吟「転形期」

五十三B 川上三太郎と岸本水府にききたいこと

五十四C 古川柳から何を学ぶか

五十五C 正しい川柳大衆化のために

五十六C 大衆的表現の問題

五十七D 火箭集四月の作品を評す

五十八C 俳句性と川柳性

五十九A 九州柳壇に望む

六十C 川柳は詩でないか

六十一A イデオロギイと技術の貧困

六十二B 「木村半文銭作品頒布会」を支持せよ

六十三D 『朝日柳壇名句番附』を読む

六十四A 諷刺と情熱

六十五A 格闘精神と芸と術と

六十六A ふところ手のレアリズム批評

六十七C 川柳の大衆性と芸術性

六十八C 川柳レアリズムの防衛

昭和十二年

六十九B 二つのデマに対する答札

七十A 近頃悲憤之記

七十一D 火華一月号作品短評

七十二B 近頃悲憤之記(続)

七十三B 井上剣花坊と石川啄木

七十四B 田中五呂八と僕

七十五D 課題吟ABC「生産場面をうたった句」

七十六A 諷刺的なあまりに諷刺的な

七十七B 井上剣花坊と石川啄木(承前)

七十八D 第一回剣花坊賞発表

七十九C 川柳の詩の贗造について

八十A 大衆的・芸術的表現について

八十一C 正しい川柳の詩の防衛のために

八十二C 川柳は一つの武器である

八十三C 正しい川柳の詩の防衛のために(承前)

八十四B 井上剣花坊と石川啄木

八十五B 井上剣花坊についての覚え書

昭和十三年

八十六A 真実の形象的表現と技術創造を

記号でもくくってみよう。

A (批評一般) 一、三、四、六、七、十、十二、十四、十五、

十六、十九、二十四、二十五、二十六、二十八、三十一、三十

八、四十三、五十九、六十一、六十四、六十五、六十六、七十、

七十六、八十、八十六

B (人物評) 二、五、十七、二十二、三十二、三十三、五十

三、六十二、六十九、七十二、七十三、七十四、七十七、八十

四、八十五

C (新興川柳) 十八、二十、二十一、二十三、二十九、三十、

三十四、三十六、四十三、四十四、四十六、四十七、四十八、

四十九、五十、五十四、五十五、五十六、五十八、六十、六十

七、六十八、七十九、八十一、八十二、八十三

D (句評) 八、九、十一、十三、二十七、三十九、四十、四

十一、四十二、五十一、五十二、五十七、六十三、七十一、七

十五、七十八

E (律) 三十五、三十七、四十三、四十五

新版追加分は、ここに掲げる。

C 「新興川柳詩野に就て」 大正十五年八月

C 「明日の川柳詩壇私観」 大正十五年八月

B 「一握の砂」その他」 大正十五年十二月

A 「地底の呻き(上)」 昭和三年三月

A 「地底の呻き(下)」 昭和三年三月

A 「川柳の正しい発展に就て」 昭和九年十一月

論評もしない評論群を再刊するのに使ったエネルギーの、何分の一かでも、見取り図作成に使ってほしかった、というのは、一叩人にも、澤地久枝にも、その他の先達に対しても、決して失礼ではないと、あえて思う。

評論群についての詳述は、また別の機会としたい。

二一 旧版全集での文献情報

『近代の漂白』 秋山清、現代思潮社、一九七〇年

わが詩人たち、として、石川啄木ら九人の中に、「鶴彬」の章が二〇ページほどある。初出は、「ある川柳作家の生涯——反戦作家・ツルアキラ」、『思想の科学』一九六〇年九月所収である(なお、こちらはこちらで全集に掲載されているが、やや不親切である)。

なお、『近代の漂白』は現在ではほとんど入手不能であるが、『日本の名随筆別巻53 川柳』時実新子(編)、作品社、一九九五年、に該当箇所が収録されている。

秋山は鶴彬よりやや年長で、面識もあった。

時代背景をうまく交えながら、鶴彬について言及している。

そして、その「俳句性と川柳性」を引用しながら、鶴彬の言葉足らずを補っている。

長くなるのを承知で引用する。

川柳には、戦前戦後を通じて二つの解決すべき問題のまゝに佇立することが、しばしばあるようだ。

川柳は文学であり得るか？

川柳と俳句の違いは？

という質問である。

今日反戦平和をうたい、その敵を刺殺せんとする意欲を示す川柳作家たちもこの問題には容易に答えきっていないかに見える。若くして死んだ鶴彬も、またこの問題をしばしば扱って苦闘した一人であった。ただ、彼は「俳句性と川柳性」のなかでこのようにいうことができた。

〔鶴彬の引用略〕

しかし、これでは何も、具体的に問題を解決したことにならない。あるいは、彼はこういいたったのではあるまいか。「つくって見ればわかるじゃないか。そのちがいは——」

新興俳句が社会的現実的な問題までをとりあげるようになり、人事諷刺詩としての川柳とその区別がわかりにくくなること、自由形の作品が双方に多くなったことを重ねると、もともと十七音によって立つ二つの詩形の区別はいっそうわかりにくくなるという懸念はあった。だが鶴彬の反戦川柳のよなものが、俳句でつくれるか、ということ、二つのジャンルの近寄りを否定する彼としてはふかく自負していたのではないか。説明不十分の彼の論文から私はそう推量する。
〔百三十四―百三十五ページ〕

その後の部分も、適宜、抜粋したい。

反戦的な作品ばかりでなく、農民生活にかかわるもの、働く女工についてなど、川柳でのみ成立し得るものであろうことを鶴の作品は示している。〔百三十五ページ〕

摺む対象もだが、摺み方におけるもつとも大きな相違が、俳句との間によこたわる。〔百三十六ページ〕

これらの作品の底をつらぬきはしっているくろぐろとした怒りは、俳句の上では到底見ることができない。川柳でなければやれない仕事だ、と鶴の作品が語っているように思われる。リアリズムとか諷刺とかいうよりも、これが川柳だ、と

いう言葉のほうが、これらの作品を前にしては、はるかに適切にひびくようだ。〔百三十七ページ〕

それ「川柳と俳句」を截断するものは、俳句が文学芸術の方に傾斜しつつ、川柳は文学であることを、そのはげしさとその俗っぽさをひっくるめて、生活に身をすりよせたところからわれわれに忘れさせる、この二つの行きちがう性格にある。この二つのものには歴史の歩みの中でそれぞれに獲得した伝統が秘められているはずだ。非芸術の文学、であることこそ川柳の誇りであり、侵されることのない特徴、性格の強靱さという気がしてくる。〔百三十七ページ〕

後出の川柳人に比べて、読ませるところがあるように思える。

『現代川柳への理解』河野春三、天馬発行所、一九六二年
版元と発行年は、旧版全集にはなぜか示されていない。

二百十九ページから三ページほど、鶴彬について言及されているのみであった。

『雪と炎のうた 田中五呂八と鶴彬』坂本幸四郎、たいまつ社、一九七七年

九章からかなり、第六章が「鶴彬の登場」で、第七章が「鶴彬の評論と作品」である。

旧版全集が、鶴彬の命日の九月刊行だが、こちらは同年の四月だ。全集のないころにしては、よく目配りされていると思うた。

旧版全集の編者である一叩人の名前の由来は、本名の苗字である命尾（めいお）の「命」を分解したものであることを知った。また、ガリ版刷り全集の苦労も、併せて述べられている。

「反抗の生涯——反戦の川柳家鶴彬」佐藤冬児、『川柳こなゆき』一九六一年八月号—一九六四年八月号

不定期に十二回の連載である。二ページが普通だが、もっと多い号もある。

川柳の引用を中心に、創作年代に沿って、手際よくまとめてある。全集のなかったころであることを想起すると、なかなかのものである。

「鶴彬——その人と作品」岡田一吐、『文化評論』二十六号。

日本共産党中央委員会、一九六三年十二月

ここでは、「一吐」であったが、旧版全集では「一と」とさされていた。後の単行本ではその「一と」で、もちろん同一人物であるが、発表時の表記をいじるのはおかしい。

さて、最後の部分をあえて引いておこう。

鶴彬についてはまだよく知られていないのが実状なので、

ここでは略歴を述べたにとどまった。機会があれば、彼の評論をもとに、その反戦詩人としての文学的考証もしてゆきたいし、それよりもまず、彼の作品集を何らかの形で整理し発行したいというのが現在の筆者の気持ちである。

これにまとめられる内容である。

作品集も刊行されたことがなければ、熱心に論じて、理解されるのは難しいだろう。

「鶴彬の二つの詩と半文銭」佐藤冬児、『川柳しなの』一九六六年六月号

九ページ弱の記事の半分弱が、二つめの詩の「川柳の神様のへド」で、一つめの詩である「阪井久良妓」を入れれば、全体の半分以上が、作品そのものである。

それはともかく、またしても最後の部分を引こう。

私はこの資料不足の段階では、この二つの詩についても、またその他の作品についても、これ以上の自己の拙い推測や解釈を加えることに、何か危惧を感じないわけにはいかない。いまは遺作品それ自体に語らせる紹介的などころで止めたいと思っている。

佐藤は後にも出てくるが、なかなか評価できる人物である。

「反戦川柳——鶴彬の作品と現在——人民の文芸『川柳』を押し進めるために」一叩人、『目黒文芸』五号、一九六六年六月

「鶴彬川柳作品の今日的意義」一叩人、『どさんこ』二号（日本民主主義文学同盟室蘭支部機関紙）、一九六九年五月
いずれも入手不能であった。

後出の、一叩人の著作の下敷きになっているのではないかと想像される。

「鶴彬評論抄」佐藤冬児、『川柳ジャーナル』一九七〇年二月号—一九七一年一月号

一回が四—十ページと、紙幅も十分である。

長い評論のままの引用もあつたりだが、全集のない時代であるので、まあよしとしたい。なかなかよく書かれている。

さて「川柳が約四百句・詩が二篇・評論類が十八篇ほどある」と最終回の終わりのほうにあるが、旧版全集で読める量の半分以下、という感じである。書かれていることも、そういうことを踏まえて読まねばなるまい。

「評論——反戦と革命の詩人——つる・あきら」牛尾絃二、松本芳味、『飛魚』五号（日本民主主義文学同盟東京港湾支部）、一九七二年八月号

入手不能であった。

「反戦川柳作家——鶴彬の肖像」前田慶穂・深井一郎、『世界』一九七二年八月号

金沢大の、前者が政治学、後者が国語学の教員である。評伝ふうの記事である。ただ、澤地久枝が言う、伝記の一人歩き、ということもやや感じる。

さて、最後に掲げられている〔付記〕を要約すれば、石川県社会運動史刊行会内の鶴彬研究班の成果を基にしたが、資料の面で完全と言ひ難い部分があり、鶴彬遺稿集を出したいと念願している、ということになる。

「川柳人」に現れたる喜多一二のあしあと」渡辺尺蠖、『川柳人』四九二号、一九七三年二月

連載記事らしいが、第七回のみ入手できた。全容は判明していない。

なお、原題は「喜多一二」であるのに、旧版全集では勝手に「鶴彬」になっているし、なお言えば「現れたる」が「現れた」にされているのも、あえて指摘しておく。

さらに言えば、発表時の名が何であったかこだわらる必要はないと思うが。

さて、昭和九年の年頭の連作「自由旗の下に」「春近し」の詳細な作品論である。伝記ばかり振り回す他の多くの記事に比べて、異色である。

「鶴彬・研究ノート」岡田一と、『和』七十六号、一九七〇年五月

入手不能であった。

後出の単行本の母体となるものであろう。

「戦争とたたかった川柳」鶴彬の業績をしのんで、岡田一と、

『アカハタ』一九六三年十二月六日

文化欄の七段抜きの記事である。略伝である。

最後の部分、毎年の命日には金沢で鶴彬祭が行なわれること、

神戸でも彬忌で句会が行なわれるとある。

この記事から四十年以上経った今も、行なわれているのだろうか。

二二二 新たな文献情報

『反戦川柳人・鶴彬 作品と時代』一叩人、たいまつ社、一九七八年

旧版全集の翌年であるが、すでにその後の発見作品を増補している。

一部の川柳と詩を掲げ、脚注の形で評論の引用、時代背景、旧版全集での注の再録と増補を行なっている。毎年の代表作の論評もあるが、時に長文過ぎて、読みづらい。

また、趣旨が違うのかもしれないが、新版の全集で、この一叩人の解説をあえて取り込んでよかったのではと思う。

『鶴彬の軌跡』岡田一と、文芸集団、一九八一年

雑誌『文芸集団』一九七八年六月号から二十二回にわたって連載されたものをまとめた、とある。雑誌初出は見えていない。

順に、「生いたち」「成長期」「プロレタリア川柳」「空白時代」「背を低くして」「しゃもの国」「終章」「鶴彬の自由詩」「附記」である。

要領よくまとめてもいるが、旧版全集が出た後でありながら、時に長い作品の引用に終始しているのが気になる。自由詩の章は、作品の紹介だけ、と言って差し支えない。

姿勢が中途半端のように思える。

いつの時も、評論群の見取り図を、という発想がない。

『薔よ、暁を抱け 鶴彬の生涯』島正富、北国出版社、一九八八年

「清き、夜明け目ざして」とともに収録された、五幕六場の戯曲である。

「無断転載、上演を歓迎します」と書かれた、変わった本である。

ともあれ、少し引用する。

鶴子 かつちゃんは、なんで師範学校へ行かなんだがや。ずっと級長を続けておって、いつも師範へゆきたい、と言うておったのに。

喜多 うん、わしア本當にゆきたかつたけど叔父さんが家の手伝いをしておりア宜いちうもんで。

ま、学校へ行かんでも勉強アできる。講義録を取り寄せるちう手もあるし。

鶴子 あたし、かつちゃんが本當に可哀そうやと思う。かつちゃんのお父うが、かつちゃんの小さいときに亡くなって、お母アが直ぐ東京へお嫁に行つて仕舞うて。師範学校にも行けんで、辛いことやろねえ。

喜多 うん、貧乏人ちうもんは、いつもこんなもんや。何に一つ思うようにならん。「十ページ」

伝記をよく理解したうえでの、創作はなかなかのものである。

『川柳人鬼才鶴彬の生涯』岡田一杜、山田文子、日本機関紙出版センター、一九九七年

山田文子は、鶴彬の実妹である。

地元の写真をちりばめた評伝である。ただ、従来のものとは比べて、著しく優れているようにも思えない。

さて、あとがきに、「鶴彬の評伝は九十余りあり、句は五百前後、それに自由詩が数篇」とある。句は、類想作をどう考えるかという問題もあるが、佐藤冬児が把握している数との違いに、あらためて注目しておきたい。

『反戦川柳作家鶴彬』深井一郎、日本機関紙出版協会、一九九八年

鶴彬の命日の刊行である。そして、新版全集と同日の刊行である。

新版全集での略年譜削除を受けてか、こちらに収録されている。

作品の引用に、略伝が混じっているのみで、前年の同社からの刊行物よりも、内容が薄い。

以上で、鶴彬単独の本は終わる。

『新興川柳選集』一叩人編、たいまつ社、一九七八年
旧版全集の翌年の刊行である。雰囲気は似た本である。

井上剣花坊、田中五呂八、森田一二、鶴彬、中島國夫、古屋雪村、木村半文銭、川上日車、渡辺尺蠖、島田雅楽王（うたおう）、高木夢二郎、井上信子、白石維思樓が収録されている。評論と作品である。

鶴彬の場合は、「僕らは何を為すべきや」「生命派の陣営に与ふ」「プロレタリア川柳批評への批評的走り書」「全国新興川柳詩人に与ふ」「木村半文銭論」「川柳の大衆性と芸術性」「二つのデマに対する答礼」と、百超の句である。

鶴彬について論じられた評論が読めるのも、この本の効用である。

まずは、副題に出てくるものは、以下のとおりである。

中島國夫「定型律批判の立脚点——鶴彬氏の時評を読みみて」

古屋夢村「新興川柳第二期運動——喜多一二君に贈る」「『影像』の宣言書——鶴彬君に贈る一片」

木村半文銭「プロ川柳の思想性と芸術性——鶴彬君に答ふ」

「答札に対する答札——鶴彬君にこれを贈る」

ついで、言及されているものは、以下のとおりである。

井上剣花坊「プロレタリア文学とブルジョア文学」「川柳王道論」

田中五呂八「机上論から實際論へ」「詩は実践にあらず」「新生命への出発」

森田一二「創作態度の問題と若干の反駁」

中島國夫「弦を張り了へて」「自由律セクト主義批判の批判」

木村半文銭「川柳の大衆性について」

川上日車「表現と闘争と思想」

これほどの本のこと、新版全集で澤地久枝がふれていないのは、奇妙としか言いようがない。

『新興川柳運動の光芒』坂本幸四郎、朝日イブニングニュース社、一九八六年

十章のうち、第七章「反戦柳人・鶴彬」、第八章「新興川柳派の終息」に、鶴彬が出てくる。まずは、よくまとまっている。

だが、冒頭の、田辺聖子の跋文を、むしろ引いておきたい。

田中五呂八の新興川柳、その実作品と、それを裏打ちする

理論武装は、川柳を完全に近代文学に脱皮させる主動力となった。五呂八に呼応し、鶴彬が登場する。鶴はプロレタリア詩人ではあるが、決して教条的な動脈硬化したイデオロギー御用詩人ではなかった。血の熱い、魂の鼓動のたしかかな、美しい川柳を作り、返す力で犀利な理論闘争を展開する。

〔中略〕

日本文学史、などというものも、このへんでもう一度すつくりとやり直して、従来の歪みを訂正しなくてはいけないのではないだろうか。〔中略〕

私は〔中略〕古川柳から読みはじめ、そこから一挙に現代川柳へ飛んで、それがすべてだと思っていた。

これは私だけでなく、一般の社会人も、そして文芸評論家も、あるいは近代文学専攻の大学の先生、学者の方々もそうではなからうか。

そうでなければ、申し合わせたように、日本の近代文学から、田中五呂八や鶴彬の名が落ちているはずはない。

大学人にはいささか耳の痛い話ではある。

『井上剣花坊・鶴彬』坂本幸四郎、リブレポート、一九九〇年

時代背景や、伝記的事実はよく押さえてはある。小生には学

ぶべきことがたくさんある。

しかし、サイズに比べて、詩の引用が長く、それではむしろあとがきにある、「肉声を伝えたいと思う」気持ちが多分には伝わっていないようにも思う。誤解のないように申せば、詩がおもしろくない、と言っているのではないつもりだが。

川柳作品、評論の子細を、省かれては困るのだ。新版の全集のない時代でも、もっとできたことがあるはず、と、失礼なことを思わず思ってしまう。

『プロレタリア短歌・俳句・川柳集』新日本出版社、一九八八年

約三〇〇の句が収録されている。井上剣花坊、井上信子の次に収録され、森田一二が続く。

変な言い方をすれば、全集での評論の合間に飛び飛びに読まされるのとは違った、解放感めいたものを感じた。

『川柳でんでん太鼓』田辺聖子、講談社、一九九五年（後に文庫化）

「手と足をもいだ丸太にしてかへし」と「働けばうづいてならぬ〇〇〇〇のあと」の二章が、鶴彬である。

前者は、「戦後に復員兵や傷痍兵がよんだのではない」と、出だしにある。「日中戦争のまったただなかで、川柳作家が堂々と発表している」と。

田辺は小林多喜二と比較し、川柳にもプロレタリアがつくのか、という読者が多いことを言う。

また、俳句をやっている人が、卑下して「自分のは川柳」と言ったり、川柳をやっている人が、卑下して「昔は俳句をやっていた」と言ったりしていることに、苦言を呈している。

以降は、表題の句や関連作を、当時の時代背景に置き直し、特高のこわさを述べている。

そして、田中五呂八、阪井久良妓、井上剣花坊らとの関係が述べられる。

昭和十二年に逮捕された時に、平林たい子もいっしょだったことも述べられている。

さて、二章めの伏せ字は「ごうもん」であるという。自身ばかりでなく、同時代人も。

自由律への移行についても言及されている。

『道頓堀の雨に別れて以来なり 川柳作家・岸本水府とその時代 下』田辺聖子、中央公論社、一九九八年（後に文庫化）

前著で、鶴彬へのウォーミングアップをしたかの田辺聖子が、一気に鶴彬の詳細について書いた。

第六章「電柱は都へつづくなつかしさ」で、九十ページ近く、鶴彬が出てくる。ここだけ独立させて評伝としても、従来の男性のものより読ませる。

単行本になる前の雑誌連載分を、澤地久枝は知っていてもよ

さそうに思うが、なぜかふれられてはいない。

『昭和・遠い日 近いひと』澤地久枝、文藝春秋社、一九九七年（後に文庫化）

やや、従来の男性軍の、ありきたりな伝記ふうで進む。

旧版全集の一叩人についても言及している。

さて、以下のところが興味深い。長くなるのを承知で引用する。

鶴彬には、向きあっている権力のもつ強権について、おそれを知らないところがあつた。学校で学ぶのでなく実地で、頭ではなく胃袋で自らをきたえたつよさと、世間を知るには経験の足りない若さをもっていた。

「ケンカ鶴」とよびたいほど強気な論陣を張る一方、鶴彬は先輩の川柳人とくにその死に対してはまことにゆきとどいた文章を書く青年だった。その人品について、色白の物静かな人だったという回想は多い。

彼は多くの川柳批評をしていて、齒に衣きせぬ手きびしい論評を加えているが、比較例として自作の川柳をかかげることになんのためらいもない。それ以上にすぐれた川柳がないからやむを得ないと本人は考えたかも知れないが、たいへんな自信家でもあつた。その傲慢を叩かれてはいるが、鶴彬を非難しながら彼を愛した人は多い。「七十八―七十九ペー

ジ]

小生がなぜ鶴彬が好きかを、はからずも教えてもらった感じだ。

「鶴彬全仕事」澤地久枝、『文藝春秋』一九九八年十月号

新版全集の宣伝を兼ねた一文である。現に、購入のための送金先まで載っている。

鶴彬の略伝と、一叩人についてふれて、なぜ自分が新版全集を出すに至ったかが述べられている。

「『鶴彬全集』を復刻刊行 澤地久枝さんに聞く」『赤旗』一九九八年十月十日

八段抜きの記事である。

編集の苦労を、「『鶴彬大学』を卒業したような感じですよ」という言い方が興味深い。

「優れた句の例証に自作を掲げたり」という言い方も、印象に残った。

やや太鼓持ち的な感じもあるが、程よく新版全集が紹介されている。

「忘れ得ぬ人 鶴彬 二十九年の遍歴」澤地久枝、『北國文華』復刊二号、北國新聞社、一九九九年冬

後半は、よくある感じの鶴彬伝だが、前半の新版全集への経緯がらみでは、引きたいところがある。

「鶴彬について書かれた多くの文章のほとんどは、一叩人氏の「全集」および文章に依拠している。あとから歩む者は、先人がなし得なかつた空白を埋める努力をするべきなのだが、出典さえ示さず、一叩人が健在か否かも確認しないものがある。論証の不十分な記述や談話からいつか伝説といたい「鶴彬」が一人歩きをはじめてもいた。一叩人は沈黙をもって答とした。

〔中略〕

鶴彬に関心をもつ人は、彼の全作品（十五歳から二十九歳まで）を読んでほしい。「伝説」ではなく、鶴彬本人による思想的変遷や境遇が、川柳や詩、もしくは評論の文中にはつきり顔をのぞかせていることに気づくはずである。それが「鶴彬研究」の土台となることを願わずにはられない。」「百二十八―百二十九ページ」

最後では、「鶴彬研究」と、はからずもある。全部は、旧版では読んだ。適任であるかはわからないが、面識のない澤地久枝にエールをもらった気分だ。

『蒼空の人・井上信子』谷口絹枝、葉文館書店、一九九八年

「第四章 戦時下をいきる」は、鶴彬が頻出する。

前述の平林たい子が司会のパーティーのことに始まり、詩人の永瀬清子による反論のこともふれている。

向いていないとされる、川柳での連作についてふれられた後、同時代人であった秋山清による鶴彬への言及がある。

「比喩が手つとりばやすすぎる。」「中略」「これでは検閲の目が光る、検閲の目をくぐりぬけて民衆の胸にとびこむものでなければ川柳の値うちがないじゃないか」といいたいものがあつた。」

しかし、ストレートな物言いが、鶴の鶴たるゆえん、という、著者の谷口絹枝に同感だ。

鶴彬については、こういっては妙だが、他のこととついでに書いている、女性のもののほうが、読みがいがある。

『現代川柳の荒野』佐藤岳俊、新葉館出版、二〇〇一年

「鶴彬とその時代」「鶴彬と田中五呂八の墓碑銘」「鶴彬のリアリズムとその世界」の三章が見えるが、その前の、本の名と同じ章にも、さらには一つ置いて前の「進（ほとばし）れ諷刺レアリズム」という章から、鶴彬が登場する。

さて、上記の章では、鶴彬が剣花坊について述べている部分も引かれている。

古川柳の穿ちと同様のものが現代に、という趣旨で、この章は進んでいく。

鶴彬の評論のタイトルが次々紹介され、「鶴彬が現代に問いかけるもの」という小見出しもある。

鶴彬の生涯を演劇として、一九九六年に上演したともある。

さて、上記の本から知った情報について、しばらくふれてゆく。

『没法子北京』東野大八、蝸牛社、一九九四年、に鶴彬が登場するという。

はたして、最初のほうの「醜虜の群れと紅い花」という章の終わりあたりである。

（戦争は終わった。それも屈辱きわまる無条件降伏だ）

唇を噛みうつろな目で、良助は傍らを見回した。そこには松葉杖や、ふらりと空っぽの片袖や、軍衣跨（ぐんいこ）をぶら下げた足切断の一群の人たちがまったくの放心状態であらずんでいた。

「中略」拳で地を叩き続ける者、なかには横転して砂まみれの男もいた。彼は立ち上がるうにも両手がないのだ。「中略」

○手と足をもいだ丸太にしてかえし

反戦川柳作家鶴彬（つるあきら）の句だ。彼はきつとこの醜虜の群を頭に思い描いたに相違ない。「五十一―五十一ページ」

また、『昭和特高弾圧史1 知識人に対する弾圧 上』明石博隆他編、太平出版社、一九七五年の中でも、雑誌『川柳人』に関する記述で、百七十八ページに鶴彬が採り上げられている。

そして、『月刊川柳大学』時実新子、一九九六年七月号に、「研究資料ノート 鶴彬 抄出と報告 編集部北川弘子」という記事がある。

見開きで、三十八句、紹介されている。戒名が釈明澄位、と知った。

さて、『社会評論』一〇二号、一九九六年四月と、『月刊オール川柳』一九九六年八月号にも、鶴彬の記事があるようだが、未入手である。

「娘の身売りは本当にあつたか」伊田稔・山形、『東北の歴史100問100答』歴史教育者協議会、新興出版社、一九九二年七十四番めの問いが、上記。

事実だとして、最後あたりに、以下の部分がある。

新聞も「身売り」防止のキャンペーンをした。石川県に生まれた川柳作家鶴彬（つるあきら）は「修身にない孝行で淫売婦」／「つけこんで小作の娘買いくる」の作品を残し、人びとの胸をうった。「百六十九ページ」

後者はともかく、前者の背景は、なるほど、と今さらながら納得。

以上で、『現代川柳の荒野』関係のは終わる。

『ミリアリア 石川の近代文学』、金沢近代文芸研究会編、能登印刷出版部、二〇〇一年

小説、エッセイ、詩、短歌、俳句、そして最後に川柳で一人だけ、鶴彬が見開きで登場する。

五句引かれ、略歴がついている。

『松倉米吉 富田木歩 鶴彬』小沢信男編、EDI叢書、二〇〇二年

夭折した三人の短詩系作家の作を、一〇八ずつ。

作家紹介は「さわやか」だが、「参考文献目録」は、率直に言うて貧弱すぎて、お話にならない。

年 『国家に抗した人びと』新藤謙、子どもの未来社、二〇〇四年

第一章が水野広徳、第二章に「反骨の川柳人——鶴彬」、以下、北御門二郎、中井英夫、家永三郎、と五人収められている。

特に目新しい書き方がされているわけではない。

この他に、鶴彬顕彰全国誌上川柳大会入選句集『あおぞら』、鶴彬研究会『鶴彬研究』という刊行物があるらしいが、現物に当たりきれしていない。

おわりに

予定量の倍になってしまったが、何とかまとめあげることができた。

以降は、川柳作品の語彙分析に挑戦したい。

最後になったが、小生を鶴彬研究に導いてくれた畏友宮崎二健と山本翠に感謝して、筆を置く。